

■ 논문 ■

日本市民による植民地支配の記憶の試み  
—「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実  
行委員会」を事例に—

大和 裕美子

I. はじめに

本稿は、1990年代から日本で展開された追悼碑建立運動において、在日韓国・朝鮮人がリーダーとなった運動に、日本人メンバーがどのような思いで関わったか、すなわち運動の動因を明らかにすることを目的とする<sup>1)</sup>。

追悼碑建立運動は、主として1990年代前後から、北海道から沖縄に至るまで、日本各地で行われた<sup>2)</sup>。この時期に追悼碑建立を目的とする団体が発足した理由は、日本国外の要因によって説明されよう。例えば韓国は1987年に民主化され、それにより、韓国の人たちからの声の日

1) 「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」（山口県）のメンバーを対象に行った運動の動因については、大和裕美子『長生炭鉱水没事故をめぐる記憶実践：日韓市民の試みから』（比較社会文化叢書），（福岡：花書院，2015）を参照されたい。

2) 従来日本においては、戦争の記憶が「礎」論（戦争犠牲者のおかげで今日の平和な日本があるという論理）が語りの中心を占めてきた。1990年以前の「反省」としての植民地支配の記憶実践として、代表的なものに岡正治氏による実践を挙げることができる。現在は、「礎」論と「反省」の記憶としての植民地支配の2つの論理が並存する状況と言える。この点について大和裕美子「日本社会における植民地支配の記憶実践：追悼碑建立運動を中心に」『제외한인연구』，（36，2015）を参照されたい。

本国内に届くようになった。その声に応答しようとした人々が行った実践の一つが追悼碑建立運動であったと言える。ただ、追悼碑建立運動が1990年前後から盛んになったことは、国外要因のみによって説明され得るものではない。キャロル・グラックが強調するように、もし「当該社会の内部に同じ意識を持つ勢力が多数存在しなければ、外部の触媒は聞く耳を持たない人々によって無視され、社会に反響をもたらすことなく消え去った」<sup>3)</sup>はずだからである。すなわちそこには、国外から届いた声を受け止めようとする日本人がいたという国内要因があった。そうだとすれば、その国内要因が形成された状況、すなわちなぜ日本人は国外からの声を受け止め、行動しようとしたのか、という問いが生じる。本稿は、追悼碑建立運動に焦点を当て、その答えに接近する試みである。

追悼碑の建立は、日本市民と在日韓国・朝鮮人によって進められ、植民地支配への謝罪と反省を刻んだという特徴を有する。例えば、「神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者を調査し追悼する会」（兵庫県）、「群馬県朝鮮人・韓国人強制連行犠牲者追悼碑を建てる会」（群馬県）、そして「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」（福岡県）、「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」（山口県）など、他にも多数の事例を挙げることができる。2015年現在、建立された追悼碑の撤去を求めるといふ、追悼碑をめぐる「新たな」動きも生じている。

本稿で取り上げるのは、九州の北部に位置する福岡県筑豊地方で展開された運動、「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」である。当該地方は、福岡地方、北九州地方、筑後地方、筑豊地方の4地域で構成される。筑豊地方には飯塚市、嘉麻市、嘉穂郡、鞍手郡、田川市、田川郡、直方市、宮若市が含まれる<sup>4)</sup>。石炭資源を有したことから炭鉱開発が行われ、1960年代までは石炭業で栄えた。日鉄鉱業、三菱鉱業、三井鉱山、住友石炭鉱業、古河鉱業、貝島鉱業、明治鉱業、麻生炭鉱、日本炭鉱（遠賀郡水巻）、大正鉱業（中間市）などのほ

3) キャロル・グラック, (梅崎透訳) 「記憶の作用: 世界の中の「慰安婦」」  
『岩波講座 近代日本の文化史 8』(東京: 岩波書店, 2002年), pp. 209-210

4) 近隣に位置する遠賀郡、中間市を含む場合もある。

か、数多くの中小炭鉱業も存在した。その後、石炭から石油へのエネルギー転換により、1976年には、当時宮田町にあった（2006年に鞍手郡の宮田町と若宮町が合併し、現在は宮若市）貝島炭鉱が閉山した。これにより、筑豊から炭鉱が姿を消すこととなった。また筑豊は、日本統治期 일제시대에、多くの朝鮮半島出身者が渡り、炭鉱で従事していたことで知られる。田川市には、「田川市石炭・歴史博物館」（1983年「田川市石炭資料館」として開館、2005年に「田川市石炭・歴史博物館」へ名称変更）があり、石炭鉱業の歴史が展示されている。同博物館に展示される、元炭坑夫山本作兵衛による炭坑の絵画等は、2011年5月、日本で初めて世界記憶遺産に登録された作品である<sup>5)</sup>。

「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」は、このような特徴を有する筑豊の飯塚市で、運動を展開した団体である。2000年に、筑豊の在日韓国・朝鮮人の無縁仏を納める納骨式追悼碑を建立した。2015年現在、118体の遺骨が納められている。追悼碑建立後には、「無窮花堂友好親善の会」へと名称を変更し、建立した追悼碑の維持・保存、新たな調査活動、追悼式の開催などを実施しながら、継続的に運動を展開している。「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」の場合、発起人はある一人の在日朝鮮人、裴来善であった。おそらく、彼がなぜ追悼碑を建立しようと思ったのか、その動機は想像に難くないであろう。後述するが、裴は高齢になったとき、筑豊の地で死んでいった同胞に思いを馳せたのである。

本稿の関心は、彼の思いをどのように日本人が受け止め、追悼碑を建立する運動へと参加するようになったのか、という点にある。当然ながら、この地域に住む全ての日本人が裴の思いを受け止めたわけではない。追悼碑建立時に、積極的に建立を反対する動きは見られなかったものの、「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」のメンバーになるなどの行動を通して、積極的に運動に身を投じていったのは、一部の日本人である。彼らの積極的な参加があって、追悼碑建

---

5) 山本作兵衛と作品に関する詳細については、「山本作兵衛氏 炭坑の記録画」(<http://www.y-sABubei.com/indeA.html>)を参照されたい。

立が実現したことは疑いようもない。

まず本論に入る前に、本稿の研究的位置づけについて述べておきたい。追悼あるいは追悼碑に関する研究は、歴史学、宗教学、民俗学を始め、複数の学問分野で行われ、記憶研究として、社会学、文化人類学でも幅広く対象とされてきた。本稿では、追悼碑そのものよりも、追悼碑を建立した主体に光を当て、彼ら／彼女らが朝鮮半島への反省のメッセージを込めた追悼碑を建立しようとしたその動因を明らかにすることを目的とする。その点で、本稿は社会運動研究でもある。

社会運動研究では、社会運動に注目することで、社会と時代を映し出すことができると考えてきた<sup>6)</sup>。社会運動を研究する上で重要なのが、運動主体者の分析である。運動の担い手はどのような社会構造的背景のもとに生まれたのか、そして運動は社会構造にどのような影響を及ぼすのか。これらの問いを、社会構造や集合行動に注目し、なぜ人は、そうした行動に身を投じるかを社会運動研究は問うてきた。しかし、社会運動研究においても、その担い手の分析を照射した研究は、運動の数に比して多いとは言えない。たしかに、運動の担い手によって運動の概要が紹介され、運動の意義などが主張されたものは少なからず存在する。しかしながら、管見の限りでは、これを1つの運動として括り出し、追悼碑建立運動を分析した研究は見当たらない。

しかしながら日本社会において、植民地支配がどう捉えられてきたか、あるいは捉えられようとしているのか、すなわち植民地支配をめぐる記憶を把握する上で、追悼碑建立運動は、重要な事例であると考えられる。先に触れたように、1990年代前後には、植民地支配に対する謝罪と反省を記憶するための追悼碑建立が盛んに行われたが、2015年現在、それらの追悼碑が発するメッセージに異を唱える動きが活発化している<sup>7)</sup>。そ

6) 大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編、『社会運動の社会学』,(東京:有斐閣選書, 2004年) p. 2.

7) この点に関しては、大和裕美子, 「日本社会における植民地支配の記憶実践: 追悼碑建立運動の事例を中心に」『제외한인연구』, (36, 2015) pp. 56-59を参照されたい。

の代表的な事例として、「記憶 反省 そして友好」の碑が挙げられる。この碑は2004年4月24日に、群馬県高崎市の県立公園内にある「群馬の森」に建てられた。土地は群馬県が提供したが、10年ごとの設置許可の更新が設けられていた。2014年が最初の更新年であったが、群馬県は10年の設置許可を更新せず、碑を管理する「記憶 反省 そして友好」の追悼碑を守る会（前身は、「群馬県朝鮮人・韓国人強制連行犠牲者追悼碑を建てる会」）に撤去を求めた。会はこれを認めず、会の名の通り、追悼碑を守る姿勢を示している。

「無窮花堂」もまた例外ではない。この追悼碑の撤去を求める動きが、飯塚市でも生じている。「日本の近代化のために働いた朝鮮人を顕彰、慰霊する目的ならよいが、国際交流広場（筆者加筆・「無窮花堂」が位置する場所の名称）は誤った歴史認識を植え付け、日本を誹謗する『反日広場』になっている。これを公共の場所に建てておいたら、碑文の内容を行政が認めた事実ということにされてしまう」というのが、撤去を求める側の主張である<sup>8)</sup>。

ただ留意されたいのは、本稿は、裏の思いを受け止めることが正しく、そうでないことが正しくない、といった論を展開することを目的とするわけではない、という点である。裏の思いが、ある日本人の心を揺り動かした。そして彼らは、裏がこの世を去ってまでなお、裏の思いを受け継ごうと運動を行っている。そのような動きをどう説明することができるのか。彼らの運動に対する思いは何なのか。本稿の関心はここにある。この問いに答える試みとして、筆者は日本人メンバーの中でもとくに中心的役割を果たして来た2名に、インタビューを実施した。

まず以下では、「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」について概観する。つぎに、同会がいかにして運動を展開していったかを見ていく。そして、同会で中心的な役割を果たした日本人メンバー2名に実施したインタビューを通して、彼らがどのような思い

8) 「「政治利用」住民ら改訂・撤去を要求 朝鮮人追悼碑に「強制連行」など非難の文 福岡・飯塚市営霊園の敷地内」『産経ニュース』<http://www.sankei.com/politics/news/140519/pl1405190004-n1.html>、2014年5月19日（2015年10月11日検索）

から運動に参加していたのかを、当時の社会背景と照らし合わせながら分析する。

## II. 「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」の概要

### (1) 会の概要

「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」は、1996年4月23日に福岡県の筑豊地区で結成された。運動の目的は、「朝鮮人強制連行の犠牲者を追悼する施設を建設すること」であった。準備会の発足後、数回にわたって会議が重ねられ、役員が決定された（本稿末尾の「規約」を参照）。結成後約5年で、飯塚市市営飯塚霊園内に納骨式追悼施設の「無窮花堂」を完成させた。

冒頭で述べたように、2000年12月2日に飯塚市営霊園内に納骨式追悼施設「無窮花堂」が完成した。ここには、80人の無縁亡者、身元不明死者、位牌が安置されている。落慶式には、飯塚市長、田川市長、碓井村長をはじめ、僧侶、教師、労働組合、筑豊市町村関係者、民団、総連、市民団体の関係者約250人が出席した。

落慶から2年後の2002年11月23日には、無窮花堂を囲む壁に、日朝関係史を記したパネル「歴史回廊」が完成し（写真2参照）、「筑豊在日コリア建立実行委員会」は2004年に発展的に解消した。その後は、「特定非営利活動法人国際交流広場無窮花堂友好親善の会」（「無窮花堂友好親善の会」）として、飯塚市の労働会館に事務局を置き、日韓・日朝の友好と親善を促進するさまざまな活動を展開している。具体的には、会の内部に「（朝鮮人）強制動員真相究明筑豊委員会」を設け、筑豊地区5市24町の自治体に対し、遺骨の収集および埋・火葬認可証などの情報開示を求める活動や、追悼式（毎年秋に開催）や「無窮花

通信」の発行を行うなどの活動を行っている<sup>9)</sup>。2015年度秋季追悼式は、10月12日に開催された。式次第は次の通りである。1 黙祷、2 開会あいさつ（朝鮮総連支部顧問・理事、林虎光）、3 主催者あいさつ（NPO法人無窮花の会理事長）、4 来賓紹介およびあいさつ、5 献歌、6 献花、7 閉会あいさつ（民団支団長・副理事長、韓光イン）。追悼式の模様については、写真3を参照されたい。

## （2）「筑豊在日コリア建立実行委員会」設立の経緯

冒頭で触れたように、「筑豊在日コリア建立実行委員会」は、ある一人の人物によって結成された。その人物が裴来善である。故裴来善氏は1921年生まれの前在日朝鮮人である。裴来善氏は2008年に他界されているため、「無窮花の会」会員の松隈一輝氏による記述を通して、裴来善氏がどのような思いから、「筑豊在日コリア建立実行委員会」が設立されるに至ったかを見ていく。以下適宜、修正を加えながら松隈の記述を引用する<sup>10)</sup>。

1986年暮れ、裴は飯塚市内の総合病院で病氣療養中であった。当時65才、日常の雑務から解放され静かに過ぎていく病室での日々は、みずからの人生を振り返る格好の機会を提供することとなった。半世紀に及ぶ日本での生活を反芻する裴の脳裏に繰り返し立ち現れたのは、1943年の二度に亘る強制連行体験であった。後年、裴はそのときの思いを書き付けている。長い引用となるが、要点は次のようなものである。

私は、1943年10月に朝鮮半島から貝島鉱業所大辻炭坑（福岡県中間市）へ強制連行されました。

貝島に来る数ヶ月前の4月に、佐賀県内の軍需工場に連行されて働いておりましたが、故郷から父親の危篤という報せを受け、会社に何度も一時帰国を願い出ましたが受け入れてもらえませんでした。その後、軍需

9) NPO法人 無窮花堂友好親善の会、リーフレット。

10) 松隈一輝、「＜足元のアジア＞を掘る—立体的炭坑物語を求めて—」（地方自治研究応募論文）（2007）



工場から逃げ出し故郷へ帰ってみれば、父親はすでに2ヶ月前に死亡しておりました。

母親と幼い弟2人、一家4人で力を合わせて幸福に暮らしていこうとした矢先、面事務所(町役場)職員に呼び出され、大辻炭坑に来ることとなりました。

大辻炭坑で働いた数ヶ月間には色々なことがありました。一緒に来て枕を並べて過ごした同僚2人が、落盤事故で負傷し病院へ行ったきり戻らなかつたり、毎晩のように拷問を受ける同僚たちの、助けを求める悲痛な叫び声に、気も狂いそうでした。

再度脱走を決心しました。捕まれば殺される覚悟で逃げましたが、無事成功し、各地の仕事場を転々としながら受難の道を歩み、1945年8月15日の解放を迎えました。

あの時、色んな話を交わした同僚たちは、今どうしているだろうか、生きているだろうか、もしかして死んでいるのだろうか、死んでいたのなら遺骨は親兄弟の元へ帰ったであろうか、それとも筑豊の或るお寺や墓地に眠っているだろうか、いつも気にしていました。

ここまでの、松隈による記述である。このような裏の思いを松隈は、「強いられた動員と苛酷な坑内労働、その結果としての傷病と異国での死—それはみずからの身にも起こりえたかも知れない—もう一つの自画像」となって、裏の胸を締め付けた」と分析する。すなわち、「大日本帝国への激しい“恨”と、それと表裏をなす亡き同胞への熱い追悼の気持ちであった」。こうして裏は、「強制連行一世として、朝鮮民族の一人として、筑豊の各寺院に放置されている同胞の遺骨を収集」することにした。

1994年10月から、裏の寺院廻りが始まった。松隈によれば、この時裏は、一人で飯塚市を含む、筑豊全域の寺院を訪ねて回っていたという。そして、裏は、数ヵ月後、数十体の朝鮮半島出身の坑夫の遺骨を見つけた。

その後、裏にとって課題となったのは、納骨式追悼碑の建立であった。



遺骨を納め、追悼する場が必要だったのである。追悼碑の建立に、多大の経費を要することは言うまでもない。しかし、そのような喪の思いを受け止め、納骨式追悼碑を建立しようとする人々は少なくなかった。6つの民間団体と複数の個人が呼びかけに応じて結集し、「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会準備会」が結成され、代表には喪が就任した。その後、「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会準備会」は、「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」と名称を変更した。

注目すべき点は、喪の思いが、日本人の人々が運動に参加する直接的な動機になったという点である。ある一部の日本人にとって、喪の思いによって建てられた「無窮花堂」が受け入れ難いものであることは、先に述べた通りである。すなわち日本社会には、喪の思いを受け入れる人と受け入れない人とが混在している。繰り返すが、なぜ喪の思いはある一部の日本人にとって、運動参加の動機となり、また原動力となり得たのだろうか。

会員は個人会員と団体会員に分類される。個人会員は約80名で、団体会員は17団体である。会費は個人会員の場合、年間2000円で、団体会員の場合は、10,000円である。会員のほとんどは日本人である。男女構成は、7割が男性で、女性が3割と偏りが見られる。年齢層には偏りが見られ、会員のほとんどが高齢である。70歳代以上が6割を占め、残りの4割も50歳代以上である。元教員、元県議であった人、また自治労などの組合組織に属していた人が多いのが特徴である。団体会員は、全日本自治体労働組合、福岡県退職教職員協会、部落解放同盟、日本労働組合総連合会、筑豊から世界を見る会、在日本朝鮮総連合会、在日本大韓国民団などであり、個人会員との重なりが見られる。この特徴に鑑み以下では、それぞれ元教員、元県議の経歴を有し、かつ会の結成時から継続して運動に関わってきた2名のメンバーへのインタビューを分析する。

### Ⅲ. 日本人メンバーへのインタビュー

#### (1) A氏の場合<sup>11)</sup>

・A氏：1939年名古屋市生まれ、中学3年のときに福岡県筑豊地区（川崎町）に転居。筑豊地区（添田町・インタビュー当時）在住。男性。元中学校教諭（英語）。「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」理事。1997年、自宅に集めた資料を学生、市民に公開するための資料室、「筑豊塾」を開設。「無窮花堂友好親善の会」副理事長（インタビュー当時）。

A氏の父は炭坑夫として福岡県の筑豊の旧古川大嶺炭鉱で働いていた。父が社宅に入った中学校のときにA氏は家族と一緒に筑豊にやって来た。「貧しい生活だったから、社宅の窓際の七輪で、ものを炊いたり、長屋の生活を。窓際でね、魚を焼く匂いがさーっと流れてくる。どこやるか？おばさんがさんまを焼きよる。初めてさんまの匂いを嗅いでね。自分で焼いたことがない。食べたことがない。何か、うらやましかった」。A氏はそのような生活体験が原点となっていると語る。

「いまでも底辺の生活に共感することがたくさんある」と語るA氏は、田川市にある石炭記念公園内にある「田川地区炭坑殉難慰霊之碑」の碑文のある一節に対し批判的な見解を持っていると述べる。「戦争中には徴用や各国捕虜等、老若男女を問わず石炭増産に狂奔し」という部分である。A氏によれば、問題の一つは、「捕虜まで囲んだのに、大量の朝鮮人の強制連行の文言を入れれないのか」という部分である。A氏はこれに抗議したことがあるという。

もう一つは「狂奔した」という部分である。「うちの親父は、命がけで坑内で採炭夫として炭鉱で働いたけれども。うちの親父はね、石炭増産

11) A氏へのインタビュー、2012年9月20日。A氏へのインタビューのインタビューは、拙者の博士論文「山口県長生炭鉱の水没事故をめぐる社会的記憶の構図と記憶実践——「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」を事例に」（九州大学・2013年3月博士学位取得）にも掲載した。

に狂奔したんじゃないと。家族を養うために、あるいは進学させるためにね、犠牲的な、賃働きをしたんであってね。狂奔させられたということ」。A氏はさらにこう続ける。「支配する者と支配される者。搾取する側と搾取される側。それがね、全然ごまかされとるわけですよ。ものを階級的に見るか見ないか。私は炭坑夫の息子としてね、やはり下から炭鉱経営者なり、資本なりを見る一つの社会構造とか、産業、経済構造をね、見る一つの基盤がありますが」。A氏のいう3つの柱、すなわち炭鉱の問題、被差別部落の問題、在日の問題に共感し、ライフワークとなった背景には、炭坑夫の息子としての生活があった。

A氏は中学校教諭の現職の時代から、これら3つの問題に力を注いできた。現場では「朝鮮人」と噂をされたこともあったという。A氏は「それこそ、在日の問題には時間をかけてね。学校も休暇をとったりしたことがあったもんやからね。好感もあまり持たれてなかったようやけど」と当時を振り返った。

## (2) B氏の場合<sup>12)</sup>

・B氏：1948年福岡県飯塚市生まれ、福岡県飯塚市在住。男性。元飯塚市職員。元社会党員。元福岡県議員（無所属）。「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」会計監査。「無窮花堂友好親善の会」理事長。

どのような思いで運動に関わっているか、という筆者の質問に、B氏はこうと語った。「この場合は炭鉱があったから在日の方が多かったですね。小学校や中学校にも在日の子がたくさんいましたから」。B氏は、「筑豊在日コリア建立実行委員会」があった飯塚市で生まれ育った。「同じクラスの中にも何人かの在日がいた」と語るB氏は、「そういった意味では在日との関係というか、つながりは近かった」と回想する。「僕の住んでいるところが屠殺場だったもんで。屠殺場では内臓の下請けとか解体とか在日の方が来られてからね。トンチャンといって売

12) B氏へのインタビュー、2012年9月24日実施。

つとったから。そういった意味では特別に壁を作るとか、そういった意味での付き合いはなかったですね」。

しかし、彼らが異なる存在であることには意識的だった。「僕の周辺では在日ということは分かっただけからですから。そういった意味では差別感を持つとっただけだと思いますよ。日常的な交わりの中では出なくても、何かあったときにはね、そういった事例はあったと思いますね」。

1995年当初から、運動に関わった。その前年に、炭鉱犠牲者を追悼する式典を行った。そのときに、戦争犠牲者と炭鉱犠牲者の追悼をしようということになったという。この場に妻来善がいた。妻は当時、ひとりで寺院をめぐり、遺骨の所在を確認していた。「妻来善さんが自分の思いを語ってくれるという。これはやろうじゃないかということ」。

6団体の団体が結成に関わったが、これらの団体のうち、ある特定の団体が中心になったわけではなく、あくまで妻来善が中心だった。B氏はこの6団体の「世界を見る会」の会員ではあったが、そのことよりも、やはり妻来善の存在がB氏にとって、運動参加の直接的契機として位置づけられている。

B氏は、かつて社会党員<sup>13)</sup>であった。また労働組合の組合員でもあった。B氏が福岡県議員選に立候補したのは、2003年のことだったが、無所属で出馬した。B氏は継続して、飯塚市にある男女共同参画の推進委員会で活動している。労働者の問題には、「男女の差があつたりするから」と語る。

このようにB氏の語りからは、労働組合、男女共同参画など、社会問題への高い関心が窺える。とすれば、「筑豊在日コリアン建立実行委員会」もまた、社会問題の一つとして捉えられているのであろうか。この問いに対し、B氏は「無窮花の場合はやっぱり歴史の問題が一番大きい。なんで今ここに在日コリアンが住んで生活しているのかっていう問題意

13) 日本社会党は、1996年に社民党へと改称された。

識」と答える。「それはやっぱり結局、日本の国内の人間が駆り出される中で強制的に連れてきて、坑内労働とか造船とか、そういったのに従事させた。そして終戦後はいままでは日本の人員だと言っていたのがね、一方的に」。「妻来善もやってたんですけど、無年金裁判で闘っているんですね。そういった意味では、あとの補償もなにもなかったという記憶があるから、そういったところは問題としてきちっと日本人がしていかないかん。救えるもんを救っていかないかん。ということと思うんですよね」。

また「人権」への意識もまた根底にあることが垣間見える。「僕はやっぱりいろいろ考える。そういった意味ではやっぱり労働組合でしょうね。職場の人の人権を守るとか。立場を守っていくというのがやっぱりあったと思うので。そういった中でいろんな方面に目を向けていったら、こんなこともある、あんなこともある、ということなんです」。

### (3) 小括

以上、2名を対象にインタビューを実施し、運動参加の思いを探ることを試みた。共通するのは人権に対する関心である。A氏は、炭鉱の問題、被差別部落の問題、在日の問題に共感し、専心してきたと語った。A氏の教員生活と、被差別部落すなわち同和問題への関心の高まりが見られた時期は重複する。1960年には「同和对策審議会設置法」が制定され、1965年には「同和对策審議会答申」（同和地区に関する社会的及び経済的諸問題を解決するための基本方針）がなされた。これは、部落差別の解消が「国民的な課題」であり、「国の責務である」と明記した政府審議会の答申であり、日本政府が「部落問題の解決を国策として取り

組む」ことを初めて確認した歴史的な文書と評価されている<sup>14)</sup>。1969年には「同和対策事業特別措置法」が10年間の限時法として制定された(1978年に3年間の延長決定)。福岡県では1970年に「福岡県同和対策長期計画及び同和教育基本方針」が策定されたのを皮切りに、「同和問題啓発強調月間」の創設(1981年)、「同和問題啓発活動研究会」の創設(1983年)、「同和問題啓発広報コンクール」の開始(1989年)、「同和問題をはじめとする人権問題に係る啓発・研修講師団講師あつせん事業」の創設(1993年)、「福岡県部落差別事象の発生の防止に関する条例」の制定(1995年)などの取り組みがなされてきた<sup>15)</sup>。とりわけ筑豊地方は、この問題と密接に関連する地域である。学校教育においても、教科書に部落問題が採用され、いわゆる同和教育が避けて通れない学習課題になっていった、とA氏が語るように、とくに学習課題と重なるのがこの地域だった。

もちろん、このような問題への関心が高揚した時期だったということのみで、A氏の運動参加の思いを説明するのは難しい。A氏の語りに見られるキーワードは、「共感」である。A氏はこう語る。「褻来善も2回ほど逃亡してね。命がけの逃亡をして、亡くなった遺骨を一心同体の気持ちで、行動しとるんです。それがね、私はもう痛いほど分かるね」。ここで、褻来善の2度にわたる渡日がいわゆる「強制連行」であったかについては、本稿が主眼とするところではない。本稿で着目したいのは、2度にわたって「強制連行」された、命がけの逃亡をした、と語る褻来善への「共感」が、運動参加の原動力となったこと。そしてその「共感」と、A氏のライフヒストリーとは密接な関係があること。そのライ

---

14) 「部落解放同盟東京都連合会」ホームページ、[http://www.asahi-net.or.jp/~mg5s-hsgw/siryou/kiso/doutaisin\\_tousin.html](http://www.asahi-net.or.jp/~mg5s-hsgw/siryou/kiso/doutaisin_tousin.html)、(2015年10月11日検索)。同会は「同和問題」を「日本社会の歴史的発展の過程において形成された身分階層構造に基づく差別により、日本国民の一部の集団が経済的・社会的・文化的に低位の状態におかれ、現代社会においても、なおいちじるしく基本的人権を侵害され、とくに、近代社会の原理として何人にも保障されている市民的権利と自由を完全に保障されていないという、もっとも深刻にして重大な社会問題である」と説明する。

15) 「福岡県人権啓発情報センター」ホームページ、<http://www.fukuokaken-jinken.or.jp/chronologies/>、(2015年10月11日検索)

フヒストリーの中でもとくにA氏は、運動の動機を「底辺の生活への共感」、具体的には、炭坑、被差別部落、在日韓国・朝鮮人への共感と関連させている。

この点は、A氏とは世代が異なるB氏にも共通する。B氏は、労働問題、男女雇用機会の問題に取り組んで来た。先に1960年代から1990年代にかけて、同和問題に関する法案および取り組み等がなされてきたことを確認したが、男女の労働格差を是正しようとする動きもまた、この人権への取り組みの一連の流れの中に含まれるものである。「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」（女子差別撤廃条約）（1985年締結）、「男女雇用機会均等法」（1985年制定）、また「男女共同参画社会基本法」（1999年制定）などがそれである。福岡県でも「福岡県男女共同参画推進条例」（2001年）が制定された<sup>16)</sup>。つまり、両氏の共通項は「人権」なのである。

B氏にもまた、「筑豊在日コリア建立実行委員会」そして「無窮花堂友好親善の会」に関わる契機には、妻来善への共感があった。B氏はなぜ、妻来善に共感したか。その背景には、自身の生活の中にながらも、隣にいるという在日韓国・朝鮮人の存在があった。B氏の語りからは、戦後、日本社会で生きてきた在日韓国・朝鮮人の置かれた状況を問題視する意識と、それを改善の方向へと導かなければならないという思いが窺える。そして、それは日本人がしていかなければならないという意識も見られる。その思いが、「筑豊在日コリア建立実行委員会」での運動、そして妻来善が亡きあとも「無窮花堂友好親善の会」に積極的に関わり、「無窮花堂」を守るという行動へとつながっている。

#### IV. おわりに

以上、本稿では「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」を事例に、在日韓国・朝鮮人がリーダーとなった運動に日本人

---

16) 同上。



メンバーがどのような思いで関わったかを、会の中で中心的な役割を担った日本人メンバー2名へのインタビューを通して、明らかにすることを試みた。インタビューから、両氏は人権への関心が極めて高いことが共通して窺えた。そして、彼らが取り組んできたテーマは、当時の日本社会で人権問題として括られながら、取り上げられてきたものであった。彼らにとって、追悼碑建立運動は、この延長線上に位置づけられるものと考えられる。

B氏は、本論で記したようにインタビューの中で、日本において在日韓国・朝鮮人が置かれている状況と問題は、「歴史問題」であると語った。なぜ韓国・朝鮮人である彼らが、日本社会で暮らしているのかという経緯を遡れば、たしかにそれは「歴史問題」として括られよう。しかし、B氏が実際に生きた時代ではないにもかかわらず、「無窮花堂」が完成して15年が経過したいまなお、褒来善の意思を守ろうとする固い決意とも言える思いの裏には、日本社会における在日韓国・朝鮮人の境遇に対する共感、そして日本人としてそれを改善していかなければならないという思いが垣間見えた。つまり、B氏にとってもまた、植民地支配に対する謝罪および反省を刻んだ追悼碑を建て、守っていくという運動は、「歴史問題」であると同時に「人権問題」でもある。すなわち、過去に起こった出来事ではなく、いまも改善すべき課題がある、現在進行中の問題であり、その意味において、追悼碑建立運動は「歴史問題」と「人権問題」の範疇の両方に属するものと言える。したがって、1990年代前後に市民の間においても見られた、植民地支配を反省の歴史として記憶しようとする動きが生じた一つの国内要因は、人権意識の高揚として説明されよう。そしてこの事例が指し示すことは、「加害国」の国民、すなわち「日本人」という一つの範疇のみをもって、一枚岩的な見方はできないということである。当然ながら「日本人」の中に分け入って見れば、人によって考え方は異なる。その考えの違いは、彼ら／彼女らがいかなる環境で、どのような人との出会いの中で人生を送ってきたのか、つまりライフヒストリーから読み解かれるものである。

九州大学比較社会文化研究院特別研究者  
ソウル大学アジア研究所東北アジアセンター客員研究員  
yumikoyamoto@hotmail.co.jp

キーワード(Key Words) :

追悼碑建立運動(the Building of a Memorial Movement), 日本市民  
(Japanese Citizens), 動機(the Motivation), 日本の朝鮮半島に對する  
植民地支配(the Japanese colonial rule in Korea.)

(투고일: 2015. 10. 19, 심사일: 2015. 11. 07, 게재확정일: 2015. 11. 13)

<국문초록>

일본시민에 의한 식민지 지배 기억의 고찰  
: 「재일지꾸호코리아강제연행희생자납골식추도비건립  
실행위원회」를 사례로

야마토 유미코

이 글은 1990년대부터 일본 각지에서 본격적으로 전개된, 식민지기 일본에서 노동을 하던 중 죽음을 맞은 한국·조선인들을 위한 추도비 건립 운동에 대해 고찰하고자 한다. 이를 위해 “재일지꾸호코리아강제연행희생자납골식추도비건립 실행위원회(在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会)”라는 이름의 단체의 활동을 고찰의 대상으로 삼았다. 이들의 운동을 식민지 지배에 대한 ‘기억실천’으로 파악하는 가운데, 재일한국인 조선인이 리더가 된 이 운동에 일본인 멤버들이 어떤 내적 동기에서 참여하게 되었는가를 밝히는 것을 목적으로 하는 것이다.

고찰의 대상인 “재일지꾸호코리아강제연행희생자납골식추도비건립 실행위원회”는 2000년 재일코리아인 배래선씨의 주도로 후쿠오카현 중부 탄광지대인 지꾸호 지방의 재일 한국·조선인 무연고 사망자를 봉안한 납골식 추도비를 건립했다. 추도비 건립 후 이 단체는 “무궁화당 우호 친선 모임”(無窮花堂友好親善の会)으로 명칭을 변경하였다. 그리고 건립한 추도비의 유지 보존, 강제노동과 피해 등에 대한 조사 활동, 추도식 개최 등의 활동을 실시하면서 지속적으로 운동을 전개하고 있다.

이 글은 해당 추도비 건립 이후 활동을 지속해 온 일본인 멤버들 가운데 특히 중심적인 역할을 해 온 2명에 대한 구술사적 연구이다. 2명에 대한 구술인터뷰의 결과 참여자들은 현재적인 인권문제에 대한 관심이 매우 높다는 공통점을 지니고 있었다. 그래서 “무궁화당”이 완성된 지

15년이 경과하고 주도자인 배래선씨가 타계한 지금도 추도비를 지키고 관련된 활동을 전개하고자 하는 결의는 여전히 존재한다. 이러한 활동에 대한 의지의 이면에는 일본 사회에서의 제일 한국·조선인의 낮은 처지에 대한 공감, 그리고 일본인으로서 이를 개선해야겠다는 내적 동기가 존재한다. 이들이 관심을 갖고 참여 해왔던 활동들의 면면을 보더라도 - 피차별 부락 문제, 제일 한국·조선인 문제, 노동의 남녀 격차 문제 등 - 추도비가 세워지던 2000년 무렵 일본 사회에서 인권 문제로 파악된 것들이었음을 알 수 있다.

따라서 이 운동의 참여자들에게 있어 추도비 건립 운동은 단순히 과거에 대한 기억에 그치는 것이 아니었다. 그들의 당대적인 인권문제에 대한 문제제기의 연장선상에 있는 것으로 파악할 수 있는 것이다.

<Abstract>

The Building of a Memorial in Japanese Society  
: Through The Case in Fukuoka Prefecture

Yumiko YAMATO

The purpose of this paper is to trace some memorial-building movements in Japanese society as remembrance of the Japanese colonial rule in Korea, focusing in the case. The case is the Mugunghwa Friendship (Mugunghwa Yuko Shinzen no Kai 「無窮花友好親善の会」) in Fukuoka Prefecture. The executive committee of the charnel-type memorial for Koreans who were drawn from the Korean Peninsula to Japan in Chikuho district (ZainichiChikuhoKoriaKyoseiRenkoGiseishaNokotsushikiTsuitoHiKonryuJikkoinkai 「在日筑豊コリア強制連行犠牲者納骨式追悼碑建立実行委員会」) was a predecessor of the Mugunghwa Friendship. It was set up in 1996 and they built the memorial in 2000 in Izuka City, Fukuoka Prefecture.

In this paper, the author interviewed two members and asked the reasons why they are involved in the memorial-building movements. The interviewees had some views in common like the following:

1. They related that their motivation for joining the movements is born out of their childhood experience.
2. They talked about their childhood experience, focusing on the memories of Zainichi Koreans (they are residents in Japan, not including new comers).
3. They have strong emotion about human rights.

Accordingly, the author concludes that their motivations relate to their childhood experience, and they feel sympathize with the leader, Bae Raeseong(裴来善).